

第5回 令和5・6年度武蔵野市長期宿泊体験活動検証委員会概要

1 議事の報告（委員の主な意見）

（1）教師の働きかけ

- ・生活指導員との情報共有は効果的であるが、個人の携帯電話を使っている事例が多い。別の区や市では宿泊行事の時に貸し出し用の携帯電話を用意しており、必要なものは予算をつける必要がある。またセキュリティ面を考えた方法にした方がよい。
- ・現地との連絡内容や方法が、実施地によって異なっており、窓口が一本化しているとよい。現地とのやりとりを行う際、学校間に差があってはならないと感じるし、効果的な働きかけに関して学校間の共有が行いづらい。契約する際の仕様書の内容を検討する必要がある。

（2）「生きる力」の測定・分析ツールを使った事業評価について

- ・1、2ポイントの増加や減少が、統計的に見て有意差があるといえるのか気になる。数値の分析を今後の教育活動にどこまで取り入れたらいいのかと疑問を感じる。
- ・0.1～0.2の変化でグラフ上は見た目が大きく下がって見え、教員は肩を落としていた。目の前の子どもたちはすごく充実して帰ってきているし、やる気もすごく増えているように思える。事業評価の表し方や項目を適正に設定する必要がある。
- ・学校現場では事業評価の目的が十分に伝わっていない。またセカンドスクールのどの取組内容を反映しているかが分からない。例えば子どもたちが学校に戻ってきて作文を書く際に、育みたい資質・能力の観点に当てはめると向上しているという実感が教員にはあるが、事業評価で数値に出すと下がっている。
- ・育成を目指す資質・能力に即した調査にしないと意味がない。この調査は子どもによる自己評価であること、現場や取りまとめの負担が大きいことなどを考えると、調査方法自体を検討する必要がある。
- ・親向けに事前・事後調査をフォームなどで行うことは、コストも手間もあまりかからず、すぐに結果が分かるので、そのようなやり方もよい。

（3）実施日数について（特に小学校第5学年セカンドスクール）

- ・5泊6日となり1泊減ったけれども、子どもたちは現地で十分楽しんでいる。また事前と事後でさまざまな力を伸ばす機会を得ることができているので、今の日数で十分ではないかと、教員や保護者の話や、子どもたちの様子から感じている。教育効果は5泊6日で十分にある。
- ・5泊6日でも6泊7日でも大きな違いはないと感じている。むしろ5泊でも子どもたちは後半疲れている。最後は疲れてきて、家族に会いたいという子が、以前より多い印象がある。
- ・4年生プレセカンドスクール2泊3日からの5泊6日または6泊7日というのは、子どもにとって日数が増えたという面で同じイメージだと思う。1日の違いは子どもには大きいことではなく、2泊を超えることに大きな意味がある。4泊5日や5泊6日となったときの子どもたちの心構えは変わってくる。6泊7日と比較したときにも、5泊あれば子どものイメージとしては十分だと感じる。

- ・管理職として、後半の2泊を経験したが、今の子どもたちは多様化しており、配慮が必要な子も多い。後半の過程では「もう限界です。」という子どもも出ていた。充実していた子も多くいたが、1日増えたとしても変わらないくらい充実して帰ってきていたので、5泊6日で十分ではないか。
- ・6泊7日から5泊6日にした際、プログラムを縮め、ゆとりがなくなってしまうという意見があったと聞く。どちらにしても活動プログラムをもっと減らした方が教育効果はあるのではないか。また現地の方や子ども、保護者の負担感が軽くなると考えられる。
- ・活動プログラムは、個人的には前半は詰め込んだほうが良いと考える。会社の人事研修では、ある線を超えるとぐっと伸びる時期があり、そういった乗り越える経験を設定するとよい。そのあとの3泊以降は、例えば午前はフリーなどの軽重をつけた工夫することで、宿の方との関わりを深めることができる。
- ・6泊7日とするのであれば、適正に休んで交代できる要員を配置すること、そのための予算を増やすことなどの対処をしていくことが必要である。
- ・6泊7日をやっていたころの保護者説明会では、「子ども同士がぶつかり合ったあとの共同生活で、さらに深い関係になる。本当の仲間になる。」と聞き納得した。それが5泊6日でできるなら5泊6日がよいが、さらに時間が必要ならば長い方がよい。
- ・5泊6日を経験した子と6泊7日を経験した子が中学校に進学したあとの姿を比べてもあまり違いを感じられない。中学校のセカンドスクールで見える姿に関しても一泊減ったことによる違いはなかったと思う。
- ・市として6泊7日にしていくとしたら、現地アンケート結果にある受け入れ先の声を受けて、十分な人員とお金をかけて依頼をする必要がある。宿泊料金の引き上げやバスの運転手の手配など、具体的な手だてを示して現地にお願いするとよい。
- ・管理職の立場として、7日間連続で教員を働かせることが今の働き方としてよいのか、また現状においても1日の労働時間について、無理を承知でやってもらっているところがあり、さらに増やす流れは疑問である。説明責任について考える必要がある。
- ・すでに現状において学校は限界なので、これ以上の日数は考えにくい。「5年生の担任になるのは、セカンドスクールを理由に難しい。」という教員が多い。家を1週間空けることは、子育てなどを置いて参加することになり、人員はかなり限られてくるのが現状である。
- ・教員の働き方改革の視点だけでなく、6泊7日に関しては、現地宿泊先、指導員、プログラムなどの視点からも議論していく必要がある。
- ・PTAにも実施日数について議論してもらおうとよいのではないか。これまでの本委員会の経過を伝えた上で、保護者の代表としての意見を集約するとエビデンスの1つとなる。
- ・他地域の方に、武蔵野市の6泊7日について話すと、感嘆される。それは移動教室や修学旅行とは違う長さをキープできている、教育に対する姿勢がすごいという表れだと感じている。そこは継続できればよい。

2 事務連絡

- ・次回、第6回12月13日（金）教育委員会室